

山外舞（やまとまい）について

- 赤井諏訪神社（いわき市平赤井）に伝わる^{いずもりゆうかぐら}出雲流神楽である。
- 諏訪神社には古くから「翁^{おきな}舞^{のまい}」と「三番叟^{さんぱんそう}」の神楽が伝えられていた。伝えられた衣装には「宝暦十辰年」（1760）と書かれていたので、少なくともそれ以前から行われていたと考えられる。
- 舞人は相当の家柄の者に限られたこと、一週間におよぶ厳しい潔斎（心身のお清め）を強いられたことなどから、昭和初期に絶えてしまう。
- 他に例のないものとの自負により、昭和17年に当時の青年会が中心となって保存会を結成。「山外舞^{やまと}」として再興される。
- 以降、諏訪神社の秋祭りにて舞が行われる。かつては旧暦7月26日、27日であったが、昭和30年代後半より新暦の同日に行われるようになり、現在は毎年8月の第4土曜日・日曜日に例大祭が行われている。
- 初日の「宵祭り」では夜に、2日目の「本祭り」では午後から山外舞が奉納されている。
- かつては拝殿で行われていたが、昭和27年頃からは別に建立された神楽殿にて舞の奉納が行われている。
- 昭和51年にいわき市の「無形民俗文化財」に指定される。
- 神楽殿の正面には「天の岩戸^{あま いわと}」を模した祭壇が作られていて、その前で次ページの10座に分けられた舞が行われる。

(1) 四方舞

地固めの舞ともいい、祓^{はら}いの舞である。鬼面に白装束のひとりが、右手に剣を持って、舞殿を四方固めにひとまわりする。囃子^{はやし}は大太鼓と締め太鼓による。今はあまり行われず、代わりに「三番叟(さんばそう)」から始められることが多い。

(2) 天地舞^{てんちの}

これも祓^{はら}いの舞である。四方舞と同じ扮装で、右手に剣、左手に幣束^{へいそく}を採って四方固めに一回りする。これ以後、囃子^{はやし}は二つの太鼓のほか、横笛二本が加わる。

(3) おしだしおかめの舞

スサノオノミコトの乱暴を恐れて天の岩戸にこもってしまったアマテラスオオミカミに再び出てきていただくこと、岩戸の前で舞い踊るアメノウズメノミコトの様を表す舞である。赤い装束のおかめが、右手に扇^{あふ}、左手に幣束^{へいそく}を採り、舞殿を四方固めに二回まわる。振りには滑稽味があふれている。

(4) 天の岩戸の舞

白装束のタチカラオノミコトが、四股^{しこ}を踏みながら岩戸に近づいて開ける。この時、舞人が裏で鳥の鳴き声を3、4回真似る。岩戸の中には神鏡^{しんきょう}と燈明^{とうみょう}3本が立ててある。

(5) 恵比寿舞^{えびす}

恵比寿の鯛釣りである。釣竿を持った恵比寿と、釣り道具を下げたひょっとこが、舞殿を海に見立てて鯛を釣り上げる。

(6) 大黒舞^{だいこく}

福頭巾を被り、風呂敷包みを背負った大黒が右手に小づち、左手に鈴を採り、四方固めに二回まわる。

(7) 稲荷舞^{いなり}

稲荷が右手に玉、左手に幣束^{へいそく}を採り、跳びはねるようにして、四方固めに二回まわる。玉は目の高さに保ち、終始幣束で祓^{はら}う振りをし、各四方の隅では片足で立つ。

(8) ながしおかめの舞

「おしだしおかめ」と同じ装束で、採物は右手に五色の流しをつけた櫛^{さかき}を持ち、四方固めに二回まわる。振りは静かで、前者とは対照的である。

(9) ろうそく舞

火伏の舞ともいう。白装束の若男がろうそくを両手に採り、四方固めに一回まわったところで、宙返りをして退く。

(10) ひょっとこ舞

ひょっとこ・大黒・恵比寿が出て、四方固めに一回まわったあと、扇子と餅を参拝者にまく。扇子を拾うと縁起がいいとか、魔除けになるといい、神棚に上げておく。

[参考文献：「いわき市史・第7巻 民俗」(いわき市、昭和47年)]